

c.すべてに興味はあるが、時代によって変わるもので、多すぎて書ききれません。

A09 公園かな。

A10 アイディアの源。

つるたけいちろう●1963年、熊本県生まれ。95年スタイル設立以来、グラフィックをはじめとするイギリス・フランスを中心に、エッジの効いた海外の新進ブランドを日本に紹介。ディストリビューター兼セレクトショップ「DUPE」オーナーでもある。



#012

中野香織
服飾史家・コラムニスト

A01 パースのコスチューム博物館やヴィクトリア&アルバート・ミュージアムを見学した後の血中コスチューム濃度が高まっているとき、書店や古書店でオーラを発しているように見えて、購入。原稿に行き詰まったとき、いすを回転させれば必ず目に入る、という位置に置いてあり、何度ヒントをもらったかわからないくらい。メンズファッション史が楽しい記述の対象になりうる、という可能性を夢見させてくれた記念すべき本たちです。

A02 '89年の夏に3か月間、'94-'95年にかけて1年間、ケンブリッジに在住。共にケンブリッジ大学の客員研究員として。今の雰囲気（とりわけテロ後）がよくわからないので、ちよつと比べようがありません。

A03 大学院での専門分野がイギリス文化だったから。日本でイギリス文化を専門にする羽目になったのは、特別イギリスが好きだったからというわけではなく、たまたまその学科の教授陣がいちばん親切でオープンに受け入れてくれたので。

A04 アングロサクソン系以外にけっこういろいろな人種がいて（インド人、パキスタン人、ユダヤ人、アラビアン、韓国人、中国人etc）、少なくとも学問の現場では皆対等でオープンなので、ガイコックジンドだからと肩身の狭い思いをすることはなく、一国にいながらにして多様な異文化を知ったような気になれました（人種

の壁よりも英国内の社会階級の壁のほうが高いかもしれない。それゆえにみんな好き勝手な格好だから、日本のキャンパスみたいに横並びのおしゃれに余計な気をつかわなくていい。この解放感はないかな大きい。

A05 '60年代のミニスカート旋風。大学の卒業論文にこのテーマを扱ってマリィ・クワント本人に手紙を書いたら、なんと本人が直々に大量の資料を送ってくれました。味気ない「論文」も一気にデザインナーとのコミュニケーションのダシに。「研究」ってやり方次第で「お楽しみ」になることを知り、以後はまりました。

A06 ジョージ・ブライアン・フランメル。

A07 365日同じツイードの上着を着続ける大学教師。タトゥーだらけの上半身をさらしてビールを飲む中年男。おなか見せファッションしてしまおうL.L.S.Aイズの女。パーバリーを着るフリーガン。サヴィル・ローのスーツとアクアスキュータータムのコートとジョン・ロブの靴で武装した日本人旅行者……。つまり、英国人が生むエキセントリックテイスト、ガイコックジンドが夢見るウルトラコンサバの共存。それを自らのデザインに生かすポール・スミスのようなデザイナー。

A08 19世紀初頭、リージェンシー・スタイル。男性服ががらりと一新した時期なので、とにかく新鮮な勢いがある。

A09 サフォーク州のロング・メルフォード。道の両側にずらりとアンティークショップが40軒近く並ぶ、アンティーク好きのメッカです。建物の多くも中世のハーフティンバー（木骨造り）で、タイムスリップした気分を味わえます。

A10 スコティッシュ・サーモン。ニューカッスル・ブラウンエール。ハーヴェイ・ニコルズのショートブレッド。分厚いサンダー・タイムズ。コリン・ファースのようなほのかな色気と落着きを備えたジェントルマン。チャールズとカミラの結婚を認める（黙殺する？）寛容。

A11 夏だけならば、ぜひ住みたい。真冬の暗さと寒さはハンパではなく心身にこたえるので、冬は避けたいです。

なかのかわり●1962年生れ。東京大学大学院博士課程単位取得。著書に「モードの方程式」（新潮社）、「モードの神話」（文春新書）、「脱書にイザ」、「ジャズ・イン・グラフィック・デザイン」（共訳、筑摩書房）、「ジャネット・ウオラフ・シヤネル・スタイルと人生」（文化出版局）など。



#013

ASASHI
ヘアスタイリスト

A01 ノッティングヒル・ゲートの中古レコード屋で購入して「GQ」（UK）の撮影後に「The Clash」のメンバー本人たちにサインしてもらったレコード。現在はリビングルームに飾ってある。

A02 現在イギリス在住。イースト・ロンドンのショーディッチ。ロンドンで仕事をするために渡英。

A03 20歳の時に初めてロンドンに来たときから、ずっとこの街に住みたいと思っていた。

A04 イギリスでは雑誌の仕事が多く、そのほとんどが世界的にも有名なものばかりなので、クオリティの高い現場で仕事をすることができると。この国では、写真のストーリーを考える時間を非常に大切にしている。

A05 イギリスの音楽。ミュージシャンとの仕事も多いので、彼らとじかに話すことによって映像だけではわからない彼らのリアルな部分を知り、音楽の聴き方が変わった。

A06 ジョー・ストラマー。

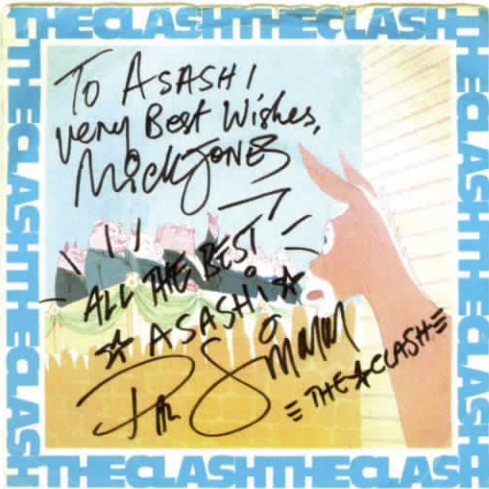
A07 リアルなストリート感がファッションの細部にあらわれている。

A08 移り変りの激しいロンドンのファッションで、いちばん熱いのは常に現在だと思ふ。またアレキサンダー・マックイーンの高さにはいつも驚かされる。

A09 テート・モダン。

A10 ストリートカルチャー。

A11 ロンドンのクリエイターの間でも、いつも東京のファッションシーンは話題になっている。若い人たちがすごく敏感で、新しいものを常に取り入れていて、それが、東京の原動力となっているのだから。



#013 Asashi

The Clash "English Civil War" 12inch Disk



#012 Kaori Nakano

3 Books on Men's Fashion

Questions

- Q01 あなたのイギリス生活を象徴するアイテムや写真、イギリスで手に入れた宝物などを一点あげてください。そのアイテムが、あなたにとってどんな意味を持つものなのか教えてください。
- Q02 イギリス国内のどこに、いつごろ、どれくらいの期間住んでいましたか。またその居住の目的は何でしたか。在住当時のイギリスは、今と比べてどんな雰囲気でしたか。
- Q03 なぜ、ほかの国ではなくイギリスを選んだのですか。
- Q04 イギリスで学生生活を送ったり、仕事をしたりするメリットは何ですか。また、教育や仕事においてイギリスと日本ではどのような部分に違いを感じますか。
- Q05 イギリスの文化やサブカルチャー、ムーブメントの中で影響を受けたものは何ですか。その文化やムーブメントのどんな部分に影響されましたか。
- Q06 イギリスが生んだ人物の中で、あなたに最も影響を与えた人を教えてください。
- Q07 ファッションにおけるイギリスらしさは、どんなところにあらわれていると思いますか。
- Q08 イギリスのファッションで、いちばん興味のある、時代やスタイル、デザイナーを教えてください。
- Q09 イギリス国内でお気に入りの場所や空間、建物などを教えてください。
- Q10 あなたにとって、ほかの国にはないイギリスの魅力などは何でしょうか。
- Q11 日本在住者に、事情が許せばまたイギリスに住みたいと思いますか。また、はい、いいえ、それぞれの理由を教えてください。
- Q12 現在もイギリス在住のかたに、東京の現在のファッションシーンをイギリスから眺めたとき、どんな印象を受けますか。

金子繁孝
演出家

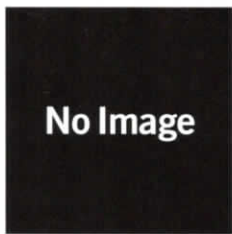
A01 在英中に生まれた二人の娘。
A02 1997・2001年までの4年間、ロンドン市内を転々とした。とにかく「行けば何かある」と思い、渡英し、気がつけばアートスクールに入学していたという感じです。当時、文化や政治、いろいろなことがいい意味でも悪い意味でも、新しく生まれ変わってきて成長している真つただ中という印象がありました。

A03 選んだというか、選択肢がほかになかったというか、イギリスを選んだというより、引き寄せられた感じですか。
A04 イギリスには特にヨーロッパ各国はもろろん、世界中の人が集まっています。いろいろな文化のバックグラウンドを持った人々に触れ、生活できる国だと思います。観光や短期滞在では知ることのできないこと、生活し、人々に触れてこそ知りうるものが大事だと思います。

A05 過去のムーブメントにはあこがれを抱きますが、リアルタイムで感じられたこと、いわゆる'90年代のYBA(Young British Artists)と呼ばれるものに、それまでの物の見方、感じ方を覆されたように思います。

A06 ウィリアム・シエキクスピアかな？
A07 正統性と反正統性。クラシックとモダン。お金持ちと貧乏。常に二律双生しているところ。
A08 自宅フラットのあった裏手、ハムステッド・ヒース。毎日のように散歩していました。

A10 お金があってもなくても、「楽しいこと」があふれているところでしょうか？



#014

ヘアスタイルとして活動を開始し、以後「ロンドン」を拠点にヨーロッパにおいてファッション誌「フュージョン」や「ミューズ」のビジュアル、広告等で活動中。現在ロンドン在住。

馬場康治
ROLLMANデザイナー

A01 '90年初頭、ロンドンに住んでいた当時、自分に合うサイズのこのモデルをマーケットなどで探していたのですが、なかなか手に入らず、それを知った、自分も所属していたモーターサイクルクラブ、MC CLUBのメンバーがわざわざ探してくれてくれたもの。ルイスに近づきはまることになった一品。
A02 '90・'95年の5年間。ベスナル・グリーンという、ブリック・レーンの近くのイースト・ロンドンに住んでいました。渡英直後はロンドンの某パレルで企画、生産スタッフとして働いていました。当時のイギリスはとにかく景気が悪く、街中は空きテナントばかりで、その反面これからは新しいものが生まれそうな雰囲気はありました。

A03 イギリスのカルチャーは昔から好きで、特にメンズのルーツともいえるブリタニッシュ・トラッドの、まずは本物を見なければ始まらないと思い、渡英しました。

A04 服、ファッションの歴史の長さの違い、その重みはリアルに感じました。その反面、日本にいたときには感じなかった、日本のよさも悪さも感じるようになりました。

A05 '60年代のムーブメント。'50年代はすべてにおいて世界的にアメリカの影響を受けていたが、'60sはイギリスにとってもカルチャー、特にファッション、バイ



#015

もちろん住みたいです。毎日、「生きてる」という実感を強く持っていたように思います。

かねてしげたか●'94年、横浜国立大学卒業。その後サルタン・アブ・ヨナルに入社。'97年に渡英し、2001年にセント・マーティンズ美術大学を卒業。帰国後は、国内外のコレクションのショーの演出を中心に活動中。

有田一成
テーラー&カッター・オーナー

A01 '93年にイギリスのサヴィル・ロー(ギープス&ホークス)で働いていたときにいただいたはさみです。そのはさみはカッターと認めてもらったときに師匠から譲り受けるもので、私はロイアルカッターから譲り受けました。今でも裁断の時には必ず使っています。

A02 '93年にイギリス海峡に臨むイーストポーンに半年(語学留学)、『93・'94年にカッターの修業のためロンドンのキルバーンに1年間。

A03 スーツの発祥はイギリスのサヴィル・ローであり、メンズファッションをやつていくなら、まずはスーツをマスターしようと思ひ、イギリスを選びました。

A04 仕事の上で国民性や感性の違いを感じました。ただ、学校を卒業してすぐイギリスに行つたので、今でも感性や考え方はイギリス的なほうだと思ひます。

A05 歴史。物を大事にするという気持ち、考え方。



#016



#016 Kazunari Arita
Shears



#015 Koji Baba
'60s Lewis Leathers Bronx Jacket



#014 Shigetaka Kaneko
Two Children